

1「あれ、まだ誰も起きていないのかな。」

今日は、お父さんとザリガニとりに行く約束をしています。だから、ぼくは早起きをしました。ぼくが起きたとき、お父さんはまだ寝ていたので、

「早く起きなさい。遅刻しますよ。」

と、いつものお母さんのせりふをまねて、お父さんを起こしました。2朝ごはんを食べているときも、頭の中は、ザリガニのことでいっぱいでした。

さあ、いよいよ出発です。ぼくが先頭に立って歩きました。ザリガニがいる川までは、歩いて二十分くらいかかります。太陽が照りつけ、汗がにじみ出てきます。3ぼくは、ずんずん歩きました。川には誰もいなかったので、早く来てよかったと思いました。

お父さんは、

「水がよどんでいるところにいるんだよ。」

と言いながら、ザリガニが潜んでいるような場所を探します。4

お父さんは、大きな石がごろごろしているところを見つけると、大きな網で何度も川底をすくいました。でも、全然とれません。何度やっても、網には、ごみのようなものがくっついてくるだけです。

5仕方がないので、場所を変えてみました。今度は、大きな水たまりのようなところです。網ですくうと、ヘドロのようなものの中に何か動いています。ぼくは、思わず、

「あ、いたいた。」

と叫びました。小さなザリガニがピチピチと動いています。6元気のいいザリガニが何匹か網にかかっていたのです。ぼくもやってみたくなって、網でヘドロをすくってみました。思ったより重くて、網を引き上げるのが大変でしたが、網の中をよく見てみると、三匹

ぐらいのザリガニが引つかかっていた。7ぼくは、うれしくなりました。怒っているみたいにハサミを振りかざしているザリガニもいました。ぼくは、ハサミに気をつけながらザリガニをバケツに入れました。

そのあとも、お父さんと交代でザリガニとりを続け、たくさんザリガニをつかまえることができました。8こんなにたくさんとれるとは思っていなかった。びっくりしました。

「ザリガニは共食いをしてしまうから、少し減らした方がいいな。」とお父さんが言ったので、残念でしたが、半分くらい川に返しました。

9帰りに、水そうとザリガニのえさを買いしました。家に帰ってから、ザリガニたちを水そうに移すと、少し驚いているようで、落ち着かない様子でした。ぼくは、ザリガニたちが早く慣れてくれるといいなあと心の中で思いました。0

(言葉の森長文作成委員会 △)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「早く夜にならないかなあ。」
ぼくは、そうつぶやきました。

「また言ってる。これで何回目？」

お母さんは、おかしくてたまらないという顔をして笑いました。

今日の夜は夏祭りなのです。ぼくは、カレンダーに赤のペンで丸をつけて楽しみにしていました。**2**綿あめにかき氷、たこ焼きにチョコバナナなど、いろいろなものを食べられるのです。

ついに待ちに待った夜です。お母さんがくれた五百円をお財布に入れて、ぼくは校門に急ぎました。**3**校門に着くと、コウジとユウキが待っていて、ぼくを見つけると、

「おう、早く行こうぜ。」

と僕をひっぱりました。たくさんのおちんがぶら下がっていて、いつもの校庭ではないみたいです。まるでおばあちゃんの家の近くの商店街みたいだなと思いました。

4何を食べようかときよろきよろきしていると、ソースのこげるにおいが漂ってきました。ぼくたち三人は、

「いいにおいだなあ。焼きそば食べよう。」

と、鼻をクンクンさせながら列に並びました。ぼくとユウキが先に買って、コウジの順番になりました。**5**コウジは、お店のおじさん

「いっぱい入っているのをください。」

とお願したので、ぼくとユウキは、思わず顔を見合わせて笑ってしまいました。コウジは、クラスの中でも食いしん坊で有名なのです。**6**おじさんは、重なった焼きそばの中からひとつひとつぱりだして、

「これはたくさん入ってるだろ。」

と言いました。ぼくは、うらやましいなあと心の中で思いまし

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

た。もしぼくがコウジだったら、あんなふうに大人にお願いできません。**7**なんだか恥ずかしいからです。お母さんにもよく、ぼくは引つ込み思案だと言われているのです。

焼きそばは、家で食べるよりも味が濃くて、お祭りの焼きそばの味がしました。お母さんの作る焼きそばもおいしいけれど、ぼくはこういう焼きそばも好きです。**8**多分、お父さんも屋台の焼きそばの方が好きだと思います。どうしてかという、濃い味が好きだからです。

そのあとは、カキ氷とチョコバナナを食べました。チョコバナナを買うときのことです。ぼくは、大きいのが食べたいなあと思いましたが、**9**ぼくは、思い切って、

「ちよつと大きめのをください。」

と言ってみました。胸がドキドキしました。お店のおばさんは、

「じゃあ、大きそうなものを選んでいいよ。どれがいい？」
と、ぼくに選ばせてくれました。ぼくは飛び上がるほど嬉しくて、一番長いと思うものを指差しました。**0**おばさんから受け取ると

き、いつもよりずっと大きい声で

「ありがとうございます。」
と言えました。少しお兄さんになった感じがしました。そのチョコバナナは、いつものチョコバナナよりもずっとおいしかったです。

(言葉の森長文作成委員会 ②)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 夏休みに、私と弟の二人だけで、京都のおばあちゃんの家に
行くことになりました。今年からお母さんが仕事を始めたので、
子供だけで行くことになったのです。子供だけで新幹線に乗るのは
初めてです。2 私は楽しみで仕方ないのに、お母さんは何だか不安
そうです。

2 「ほんとに寝ちや駄目よ。大丈夫ね。」

お母さんが何度も私の顔をのぞきこんで言いました。私は、
自信満々で、

「大丈夫だよ。心配いらないから。」

と言いました。お母さんは、でもまだ不安そうな顔で、
「頼んだからね。ハルが寝ちやったら早めに起こしてね。」

と繰り返します。3 お母さんは本当に心配性なんだからと心の中で
思いました。

新幹線に乗るときは、いつもシウマイ弁当を食べます。私はシウ
マイが大好きなので、このお弁当は好物です。売店で、シウマイ
弁当とお菓子を買いしました。4 私はチョコレート、ハルはグミで
す。それを抱えて新幹線に乗り込みました。

ドアのところでお母さんがまた心配そうな顔をしたので、私とハ
ルは、元気いっぱい手を振りました。切符を見ながら席を探し
て、座るとすぐにお弁当を食べる用意を始めます。

5 「いただきます。」

二人で手を合わせました。わくわくしながら蓋を開けると、シウマ
イが五つ並んでいます。まるで仲良く座っているみたいです。

「やっぱり新幹線に乗ったらシウマイ弁当だね。」

私は、ハルに言いました。6 ハルも、

「ぼくも大好き。」

と言いながら、一つ目のシウマイをパクリと口に入れました。私
は、おいしいものは最後に味わって食べるのが好きです。お行儀が
悪いと渋い顔をするお母さんもないので、私は五つ全部を取って
おくことにしました。

7 私がとっておきのシウマイに箸をつけようとしたときです。ハ
ルが、

「ああつ。」

と叫びました。驚いた私の足元を、コロコロとシウマイが転がって
いきます。ハルの落としたシウマイでした。それも、最後の一つで
す。ハルは今にも泣き出しそうな顔をしています。8 なんだかわか
いそうになり、私は自分のシウマイを一つ、ハルにあげました。も
しお母さんが一緒なら、お母さんが自分のシウマイを分けていたと
思います。ああ、早く食べてしまえばよかったなあと残念に思いま
したが、ハルがとても喜んだのでよかったです。9 それに、通路を
はさんで隣に座っていたおばあさんが、

「さすがお姉ちゃん、偉いわね。」

と声をかけてくれました。恥ずかしかったけれど、嬉しかったで
す。ハルは、シウマイのお礼だと言って、自分のグミを半分分けて
くれました。ハルもいいところがあるなと思いました。

0 本を読んだり、しりとりをしたり、などなぞを出し合ったりす
るうちに、いつの間にか京都に着きました。お母さんはまだ心配し
ているかなあ。京都に着いたことを早く伝えたいなと思いました。

(言葉の森長文作成委員会 ㉔)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34